

大原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

大原遺跡

農林漁業用揮発油財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

序

社会の変化に伴って、飯田市内に於いても様々な開発事業が行なわれています。それらに関連し、飯田市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存として後世に伝える事業を実施しています。

本報告書は、西部山麓線の新設に伴う遺跡発掘の報告書で、3冊めに当たります。西部山麓線の通過地帯は、前2冊の報告にも有りますが、中央アルプス南端の山裾で、飯田市街から見ると一段高く住むには条件が悪いと思われますが、縄文時代から弥生時代の住居址が発見されております。この事実から埋蔵文化財の分布は、現在私達が住んでいる場所すべてに在るといつても過言ではないと思います。

西部山麓線は伊賀良・山本地区上段地帯の開発・活性化を目的とした道路であります、古代人の残した貴重な文化遺産の消滅という事実も心に止めておきたいものだと思います。本報告書は消滅する文化財を後世に残す、唯一の記録です。

古代人の生活・文化が私達に語りかけてくるのが、発掘報告書であり又発掘された土器・石器だと思います。

この報告書にあります歴史の事実は、私達の遠い先祖の生活史であり、原点といつても過言では無いと思います。

本報告書から私達の心の奥に潜む、過去の何かが目覚めて来るかもしれません。皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。

終りに、調査実施にあたり様々にご協力をいただいた、関係者各位に心から感謝申しあげます。

平成3年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

- 1 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓3期地区道路建設に伴う、飯田市北方「大原遺跡」発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野県下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名「大原遺跡」に、略号「OOH」を与え現地作業から、整理図面・遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。
- 4 本書は、佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
- 5 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
- 6 本書に掲載した造構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ（傾斜面の為、穴の壁最低部）をcmで表している。
- 7 エレベーションの水平線に付した数字は、標高をmで表したものである。
- 8 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で、ロー状光沢は網掛けで表した。
- 9 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序

例言

I 経過

1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境	7
2 歴史環境	7

III 調査結果

1 縄文時代	
1) 壴穴 1	11
2) 土坑 1	11
3) 土坑 2	13
4) 性格等不明の穴	13
5) 造構外出土遺物	15
2 弥生時代～古墳時代	
1) 1号住居址	17
2) 2号住居址	19
3) 3号住居址	19
4) 造構外出土遺物	21
3 平安時代以降の出土遺物	21
IV まとめ	21

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査位置及び周辺図	4
挿図 3 調査区位置図	5
挿図 4 調査グリット土層柱状図	6
挿図 5 調査造構全体図	8

挿図6	竪穴1・性格等不明の穴	12
挿図7	土坑1・2	13
挿図8	性格等不明の穴（中央杭No.112～113の間）	14
挿図9	性格等不明の穴（中央杭No.113～114の間）	15
挿図10	性格等不明の穴（中央杭No.117～115の間）	16
挿図11	1号住居址	17
挿図12	2号住居址	18
挿図13	3号住居址	20

図版目次

第1図	竪穴1・土坑1出土土器	24
第2図	土坑1・土坑2・遺構外出土土器・石器	25
第3図	遺構外・1号住居址出土土器・石器	26
第4図	1号・2号・3号住居址出土土器・石器	27
第5図	3号住居址・遺構外出土土器・石器	28

写真図版目次

図版1	調査前・遺構分布状態	30
図版2	竪穴1・土坑1・2	31
図版3	1・2号住居址	32
図版4	3号住居址	33
図版5	トレンチ・グリット	34
図版6	竪穴1・土坑1出土土器・石器	35
図版7	土坑2・1号住居址出土土器・石器	36
図版8	2・3号住居址出土土器・石器	37
図版9	3号住居址・遺構外出土土器・石器	38
図版10	遺構外出土土器他	39
図版11	調査スナップ	40

経過

1 調査に至るまで

飯田市西部の中央アルプス山麓ぎわは、果樹園が主体の農業地帯である。近年の農業經營上、車を使っての農作業が不可欠の状況となっているが、この地帯の道路は不十分なもので、南北方向に走る主要な道路は現国道153号のみであり、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区・伊賀良地区・上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。

計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農政部局においてなされ、具体的に建設へと至った。

その結果飯田市西部の山本・伊賀良地区の活性化を目指とした農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区の建設工事は、伊賀良地区南西端からⅠ期工事として着手された。

それにかかる埋蔵文化財の発掘調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の3遺跡について行なわれ、平成元年度にⅡ期工区の細田北遺跡が行なわれた。

引き続き、下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の協議を基に、発掘調査実施についての委託契約を締結した。その契約により現地での発掘調査に着手した。

2 調査の経過

平成2年7月19日に現地に資材運搬を行い、23日（月）発掘調査開始を予定したが、雨降りになり、翌24日から開始した。

道路敷地は山麓に発達した広大な扇状地の斜面を、東に向かって下っており、ほぼ中央で北に方向をかえ、扇状地を横切り平坦になる。高低差は約20mあり、中央から北は道路・水路・畦畔等にかかる。

西端部から任意に試掘グリットを設定し、調査を開始した。グリットは20mのセンター間に3カ所を基準に配置した。グリット番号は南端から北東へ0・1・2～26を付した。トレンチは中央の道路に挟まれた縦に1×15mを設定した。

グリットは基盤の黄色土・砂礫層まで掘り下げ、遺構の確認できた所と土層観察で遺構の存在の想定される場所に重機をいれ、表土を剥ぎ調査を行った。本調査は西端から約75mを行った。そこより北東側は遺構が確認できず本調査は行わなかった。

黄色土面（ローム層）で遺構の検出作業を行い、縄文時代～古墳時代の遺構を確認した。統一して各遺構の掘下げ調査・写真撮影・実測作業等を行ない、重機で埋戻し8月21日に発掘作業を終了した。

引き続いて飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記・復元作業の後、遺物の実測・写真撮影等の諸整理作業を行ない、本報告書を作成した。

3 調査組織

1) 調査団

調査担当者	小林正春
調査員	佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之 渋谷恵美子
作業員	木下傳 木下当一 高木義治 高橋収二郎 高橋寛治 細田七郎 中平隆雄 松下直市 松下真幸 森 章 坂下やすみ 伊藤和恵
整理作業員	池田幸子 伊原恵子 大藏祥子 金井照子 金子裕子 唐沢古千代 唐沢さかえ 川上みはる 木下早苗 木下玲子 柳原勝子 小池千津子 小平不二子 小林千枝 佐々木真奈美 田中恵子 筒井千恵子 丹羽由美 萩原弘枝 林勢紀子 原沢あゆみ 橋本宣子 平栗陽子 福沢育子 福沢幸子 牧内喜久子 牧内とし子 牧内八代 松本恭子 三浦厚子 南井規子 宮内真理子 森 信子 森藤美知子 吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まつ美 若林志満子

2) 事務局

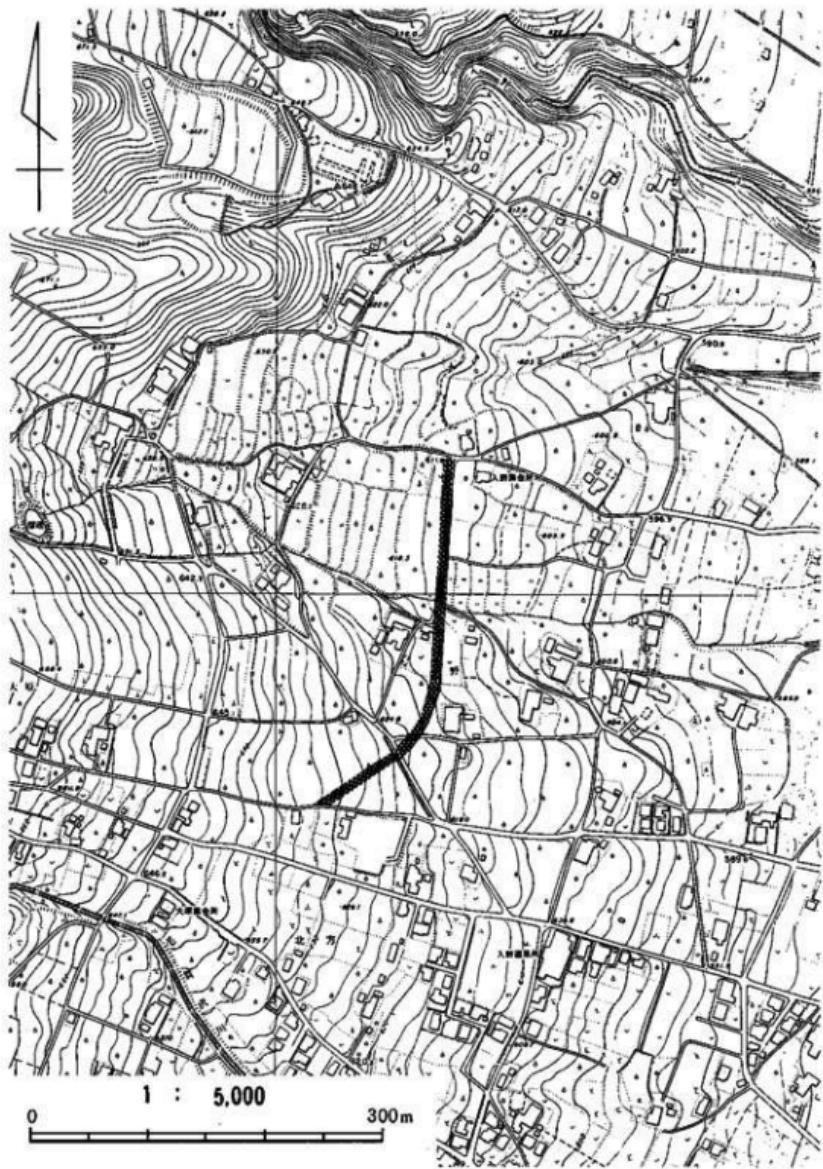
飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦	(社会教育課長)
中井洋一	(社会教育課文化係長)
小林正春	(同上 文化係)
吉川 豊	(同 上)
馬場保之	(同 上)
篠田 恵	(同 上)



1. 大原遺跡 2. 飯田垣外遺跡 3. 火振原遺跡 4. 梅ヶ久保遺跡 5. 細田北遺跡
 A. 西の原遺跡 B. 立野遺跡 C. 与志原遺跡 D. 上の平東部遺跡 E. 寺山遺跡
 F. 六反田遺跡 G. 大原遺跡 H. 酒屋前遺跡 I. 滝沢井尻遺跡
 J. 小垣外(辻垣外)遺跡 K. 三壹淵遺跡 L. 上の金谷遺跡 M. 中島平遺跡
 N. 宮ノ先遺跡 O. 鳥屋平遺跡 P. 殿原遺跡 Q. 小垣外・八幡面遺跡

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

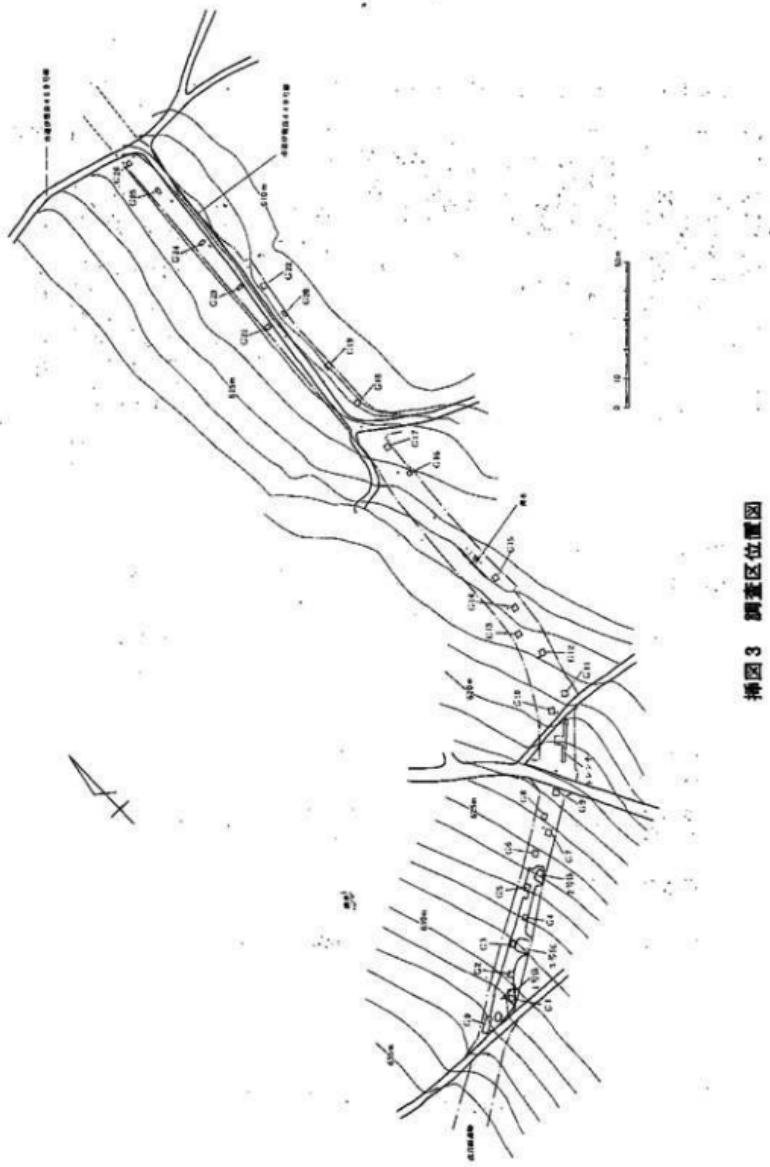
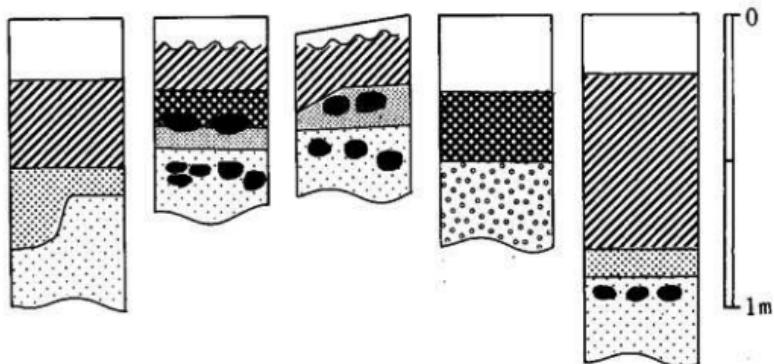


図3 調査区位置図

グリット1 グリット10 グリット14 グリット20 グリット26



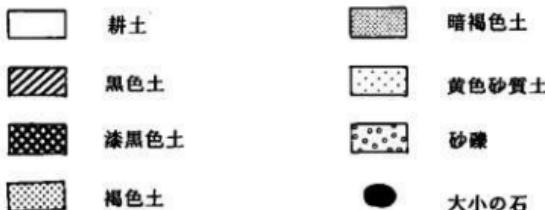
緩傾斜
果樹園

ほぼ平坦
果樹園

緩傾斜の
小段丘端
果樹園

湿地
水田

小段丘端
元水田で
造成が成
される
果樹園



挿図4 調査グリット土層柱状図

II 遺跡の環境

1 自然環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西4～2kmに位置し、北西半分は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上、東南半分は扇状地を截せている段丘上にあり、両者が連続した地形上に立地している。

大原遺跡は、飯田市北方入野に位置する遺跡である。字入野は山麓の扇状地上部の、広大な東向きの斜面にある。北側斜面の下部で字新井に続き、南西側は広い谷を挟んで平成元年度調査の梅ヶ久保である。北西側は山が迫り、南東側は斜面が緩くなり野池・山口に続く。調査地点の西端は入野のほぼ中央に位置し標高630mで、東に比高差約15m延長150m下り、北に向きを変え斜面を横切る形になり比高差2m延長約230mで調査区が終了する。そのうち遺跡に指定された範囲は、調査区西端から東へ150mで、南端は調査区から20m北端は100mの範囲である。

現在この遺跡範囲はすべて果樹園で、深耕・配管により表土の浅いこともあり破壊が進んでいる。

この広大な入野の北から東に向いた、広大な斜面にも隠れた微地形があり、住人の話では斜面途中に湧水の出るところがあるという。基盤の土は黄色のローム層で一部に礫が混入している。

この斜面は飯田市街地から見ると、最後まで雪の残るところで現在の住環境からすれば劣悪と思われるが、ここに生活の拠を定めた古代の人々の労苦も偲ばれる、遺跡といえる。

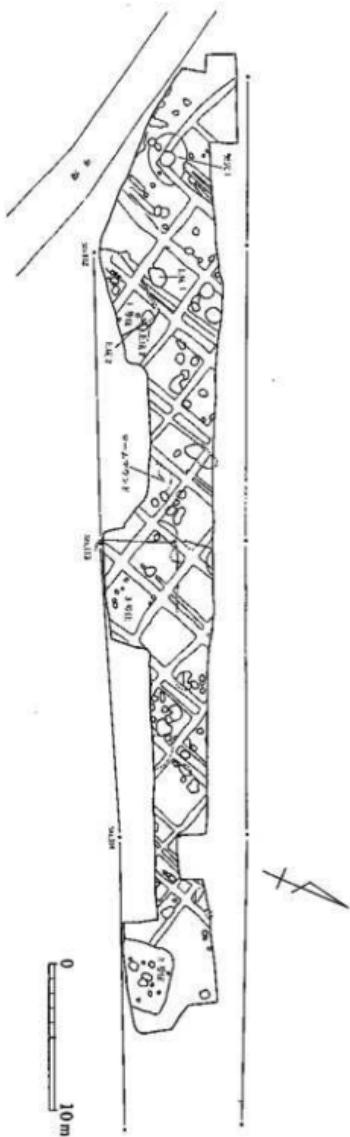
2 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といって良く100遺跡を数える。調査がなされた遺跡は、当広域農道に伴う発掘調査で飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡（注1）細田北遺跡（注2）、学術調査による西の原遺跡（注3）立野遺跡（注4）、中央自動車道にかかる発掘調査で与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三塗淵・上の金谷各遺跡（注5）、諸開発にともない中島平（注6）・宮ノ先（注7）・酒屋前（注8）・鳥屋平（注9）・殿原（注10）・八幡面・小垣外（注11）・下原（注12）等の遺跡である。

縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

特に本農道の先線に位置する立野遺跡は戦後まもなく數度の調査がなされ（注4）、縄文時代早期押型文土器の様式遺跡である。しかし遺跡は耕地整理・土取り等により消滅状態に近くなっ

図5 調査機構全体図



ている。

中央自動車道に伴う、各遺跡の調査では各期の住居址等の造構が調査され、扇状地中央部付近の遺跡状態が明確にされた。

農業構造改善事業に伴う、中島平遺跡では縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の造構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡の在り方が注目された。

伊賀良地区内の古墳は52基（注13）が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川両岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳がわずかに見られる。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名前が見える。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるが、その所在は確認されておらず、位置については諸説があり、共に中央自動車道から、南東側の扇状地端部にかけて設定されている（注14）。

中世に入ると伊賀良庄の記録（注15）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり小笠原氏繁栄の基盤の一つとなった地区である。又、当遺跡の西方約500mには、桜山城跡があり、戦国期に於いても何等かの意味を持った地としての位置付けもなされる。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

こうした歴史背景のある伊賀良地区内に置ける、大原遺跡は、それら伊賀良地区全域を見下ろす地にあり、地区内で展開された各時代の様々な人々の生活を見続けてきた場所である。

造構の確認された縄文時代、弥生～古墳時代において、かような高所まで、居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる。

注

- 1 飯田市教育委員会 1987 『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』
- 2 飯田市教育委員会 1990 『細田北遺跡』
- 3 伴信夫・宮沢恒之 1967 『長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告』『信濃』
- 4 神村透 1968・69「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号
神村透 1982「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
- 5 長野県教育委員会 1972 『中央道調査報告一飯田市内その2一』
- 6 飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』
- 7 飯田市教育委員会 1978 『伊賀良宮ノ先』
- 8 飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』
- 9 飯田市教育委員会 1983 『鳥屋平』
- 10 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』

- 11 飯田市教育委員会 1988 「小垣外・八幡面遺跡」
- 12 飯田市教育委員会 1989 「下原遺跡」
- 13 市村咸人 1955 「下伊那史」第2巻 下伊那史編纂委員会
- 14 市村咸人 1961 「下伊那史」第4巻 下伊那史編纂委員会
- 15 宮下 操 1967 「下伊那史」第5巻 下伊那史編纂委員会

III 調査結果

調査において確認された遺構は次のとおりである。

住居址	3軒
竪穴	1基
土坑	2基
性格等不明の穴	多数

1 縄文時代

1) 竪穴

① 竪穴1 (挿図6、第1図)

調査区西端近くに検出したが、果樹園の肥料溝に切られている。3.6×2.6mの梢円形を成し中央に約1mの円形の落ち込みがあり、長軸方向はN65°Eを測る。深さは検出面から20cm以下であり、中央の穴はその面から60cm余掘られている。外側の掘り込みは比較的急であり、底部は床のように堅く、中央の穴はやや緩く掘られている。壁にかかって1ヶ・床面に3ヶの穴があるが壁にかかったものは竪穴1を切っている。覆土はほぼ一層で漆黒土が入っていた。床面が堅く竪穴としたが性格などは不明である。

遺物は本書に掲載したものの他に8点出ているが、いずれも無文である。第1図1・2・3は口縁片である。1は半截竹管による押し引きと、刺突文が施されている。2は細い半截竹管を使い連続の単線で飾る。4・6は縄文を施した後半截竹管で施文している。4・5は平出第Ⅲ類A系の破片である。

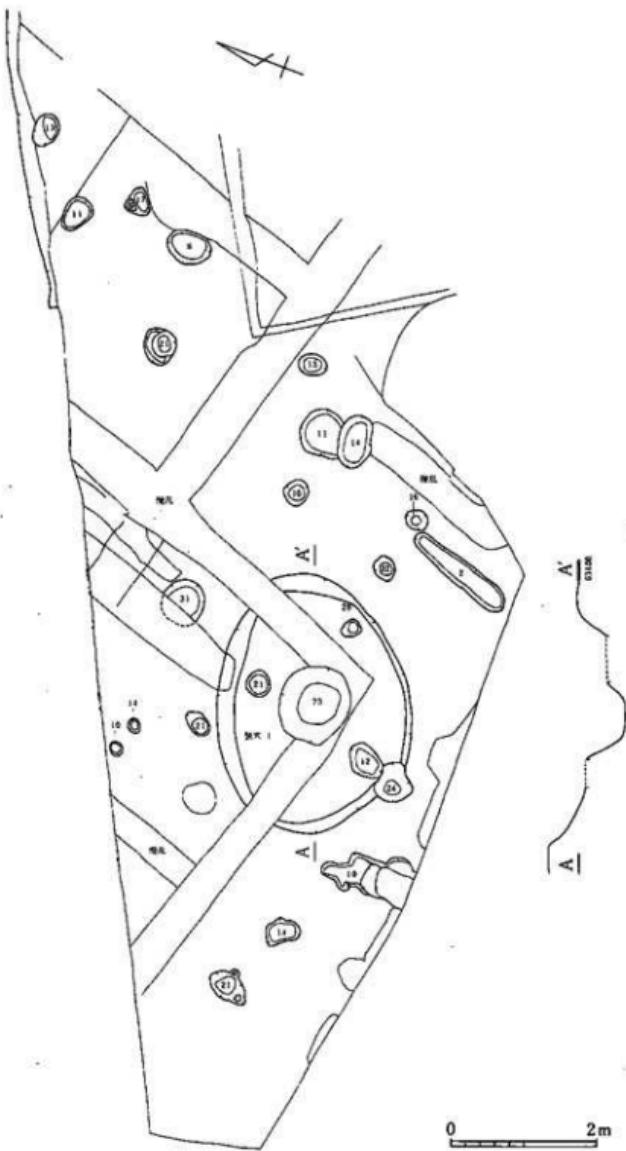
時期は出土土器から中期前葉から中葉と考えられる。

2) 土坑

① 土坑1 (挿図7、第1・2図)

調査区西端近く1号住居址の北西に検出した。肥料の溝に切られているが、全容はほぼ把握できた。掘り方は穴が2個切り合ったような形で2段になっており平面形は1.6×1.1mの隅丸長方形を成し、長軸方向はN20°Eを測る。北東側が浅く検出面から50cm前後で、南西側は140cm余と深く袋状になっている。南西の壁は上部より約20cm奥になっており、底は基盤の礫が出ている。形態から貯蔵穴と考えられ、深いため途中に段をつけたものであろう。

遺物の出土は比較的多く、土器・石器である。出土した土器はほぼ同時期であり、第1図7・10・11は口縁に凸帶をもち肩から胴上部に半截竹管による細かな沈線を施し、胴部は縄文を施す。



挿図 6 穴 1・性格等不明の穴

第1図9は口縁部外側に半截竹管による押し引き、内側に縄文を施し口縁下は半截竹管で直・曲線を施しているが胴部の施文は把握できない。第1図8は表面全体に縄文を施し、口縁の内側と上端部にも縄文を施す。第1図14は深鉢の底部で底部ぎわまで縄文を施す。第1図13はミニチャの底部で図化部の半分が現存し、内部の角にはへら痕が残り外面は無文である。第1図15~29は胴部片であり縄文が施され、7あるいは8の同一個体の可能性がある。12・30は半截竹管による沈線を密に施し30は非常に細かい。石器は3点出土している(第2図)。打製石斧1と横刃型石器2は硬砂岩製である。3は黒曜石の剥片である。

時期は出土土器から前期末から中期初頭である。

② 土坑2 (挿図7、第2図)

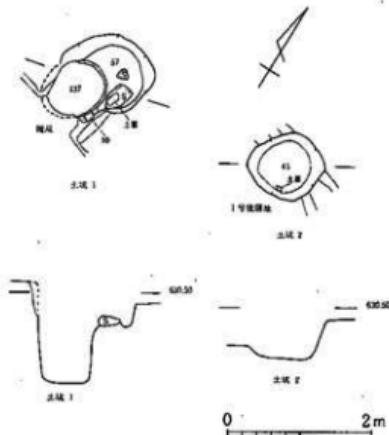
1号住居址を切る位置に検出した土坑である。約1×1mの隅丸方形で検出面から45cmの深さを測る。壁はやや緩く、底部はほぼ平坦で形は円形に近くなる。

遺物は深鉢片と石器が出土している。4は口縁で口唇部は緩く波状になり、三角形の穴があき無文である。それより下は半截竹管で平行の沈線を施し、円形と波状の粘土紐を貼付する。5は小破片であるが、4と同様な施文である。6も細い半截竹管文を施す。石器は打製石斧の半欠品9と黒曜石の剥片10・11である。

時期は縄文時代中期初頭と考えられる。

3) 性格等不明の穴 (挿図6・8・9・10)

調査区内に多数の穴を検出し、規模と遺物の量によって竪穴・土坑・穴に分けた。穴は遺物がほとんど出土せず時期・性格等把握できないが、各遺構の周囲の穴は付属する可能性もある。穴はやや集中する場所とほとんど検出できない場所があるが、道路用地が果樹園の中央を通っているという事で、用地内すべてを調査区にできず、穴の分布状態も明確ではない。



挿図7 土坑1・2

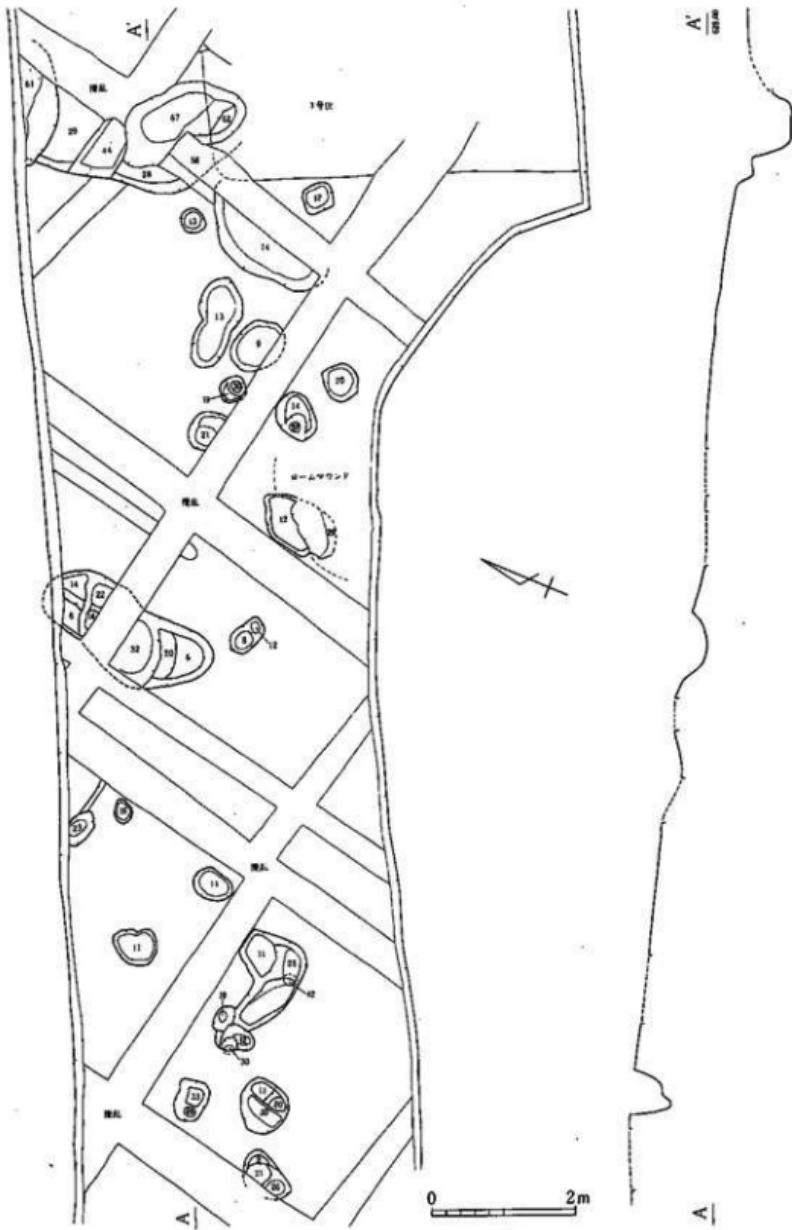
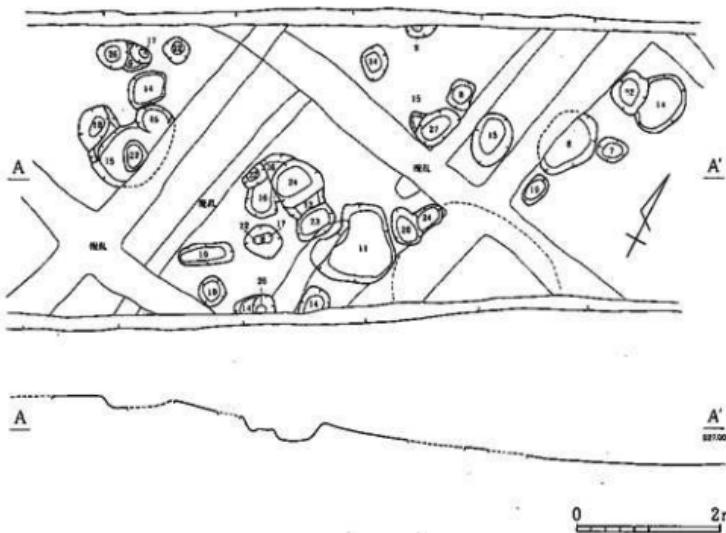


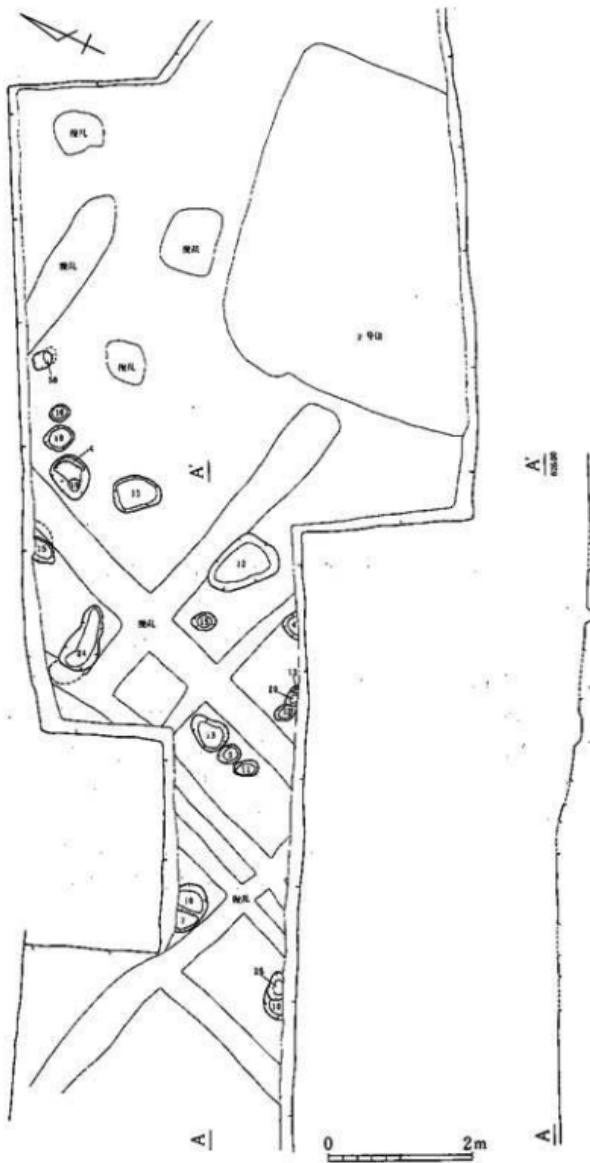
図8 性格等不明の穴 (中央坑No112~113間)



挿図9 性格等不明の穴（中央坑No113～114間）

4) 造構外出土遺物（第2・3図）

検出時等に、造構外から出土した遺物であり、グリット一括で取り上げた遺物である。出土した場所は縄文時代の造構を検出した、調査区西端からがほとんどである。第2図12～27は縄文が施され、土坑1に関連すると考えられ、前期後半から中期前葉の深鉢片である。この内12・19～21は1号住居址の覆土中から出土した。第3図1は地文が縄文で、半截竹管で沈線が施され中期前葉と思われるが前期の可能性もある。第3図2～12は中期前葉から中葉の土器片であり、4は箇による連續刺突のキャタピラ文を施し2・3とともに藤内式に比定できる。6～12は半截竹管で施した沈線で飾り、平出第III類Aに比定できる。1・6・7は1号住居址の覆土から出土した。13は2号住居址から出土し中期後葉の土器である。石器14～17は試掘グリットと検出時に出土した。



插図10 性格等不明の穴（中央庭No.114～115間）

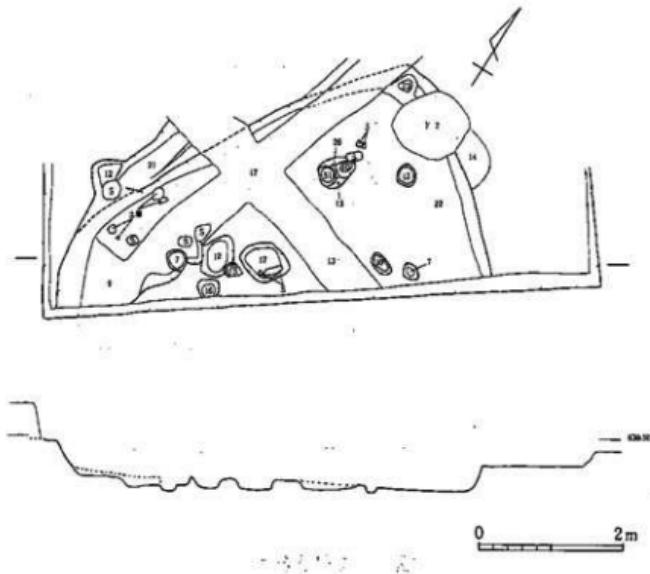
2 弥生時代～古墳時代

1) 住居址

① 1号住居址（挿図11第3・4図）

調査区西端近くに検出し、用地外にかかり肥料の溝に切られ、土坑2を切る。約1%調査できただけなので確実ではないが、隅丸方形の堅穴住居址で規模は6×(6)mが推定できる。主軸方向は炉が検出できなかったが、地形の高いほうが奥壁と考えられN50°Wである。覆土はやや黒っぽい褐色土の一層であり、試掘グリットで住居址の確認ができた。壁は検出面から50～30cmあり、垂直に近い立ち上がりである。床面は南東へ緩く下がっており、全面的に軟らかく部分的に基盤の礫が露出している。主柱穴で一定の深さがあり確実なものは、北隅に並んだ2本のみである。西隅の穴は位置的にはよいが、20cmと浅い。北隅の穴は2個ある事から、柱の立替が推測できる。炉は奥壁主柱穴間に位置すると思われ、肥料溝に破壊されたものであろう。

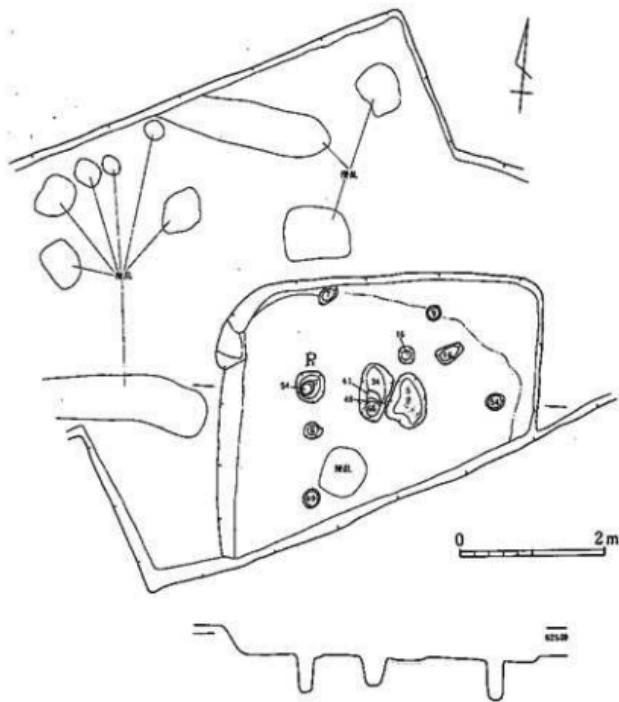
遺物は土器・石器と混入の縄文土器・石器である。第3図18は口縁部に最大径を持つ甕であり、外面は刷毛ナデがなされ頭部に炭化物が付着している。内面は横ナデである。第3図19は甕の底



挿図11 1号住居址

部で $\frac{1}{2}$ 残っている。第3図20は壺で、胴下半 $\frac{1}{5}$ が西隅近くの壁下から出土した。外面は方向の一定しない刷毛ナデで、内面にも部分的に刷毛ナデ痕が残っている。器形は、胴部球形で口縁は有段口縁ないしは複合口縁になる形態と推測される。石器は打製石斧・有肩扁状石斧・黒曜石製小型石器が出ている。第4図1の打製石斧は第3図20の壺に接して出土し硬砂岩製で少し欠けている。第3図20の有肩扁状石斧は、北の主柱穴と土坑2の間から出土し、床面から5cm浮いて出土し、刃部にロー状光沢が残る。第4図2~5の黒曜石の小型石器は縄文時代の混入であろう。

時期は壺の形態から古墳時代前期である。



挿図12 2号住居址

② 2号住居址 (挿図12第4図)

調査区東端近くに検出した、竪穴住居址である。用地外にかかり果樹園の肥料溝と薬剤散布用の配管溝に切られている。(4.5)×4.5mの隅丸方形で、主軸方向はほぼ真北である。覆土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色土で中央部から東側に入り、下層は茶褐色土が入っていた。上層の黒褐色土は、斜面に掘り込まれた竪穴住居址のため下方に堆積したものであろう。壁高は斜面上方の西側が高く40cm前後、下方の東側が10cm前後であり、垂直に近く掘られている。床面は、挿図の一点鎖線の内側が堅く、北東の壁下がやや軟らかであり斜面と同じく、東方に緩く傾斜しており比高差は17cmある。主柱穴は2本確認し、床面から50cm余の深さを持つ。掘り方は不正円形で20cm前後と小さく、北西隅のものは上部を5cmほど広く掘っている。炉は、北側主柱穴間中央に少量の焼土を検出し、5~3cmとわずか凹んでおり、地床炉である。炉の左側に、確認部分で最深の66cmを測る穴を検出したが、斜めに掘られており性格は不明である。

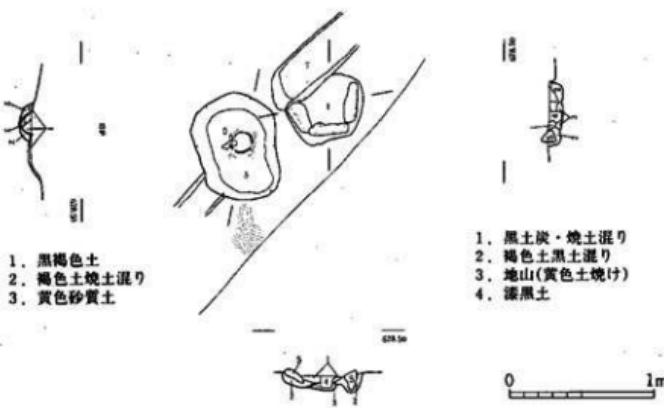
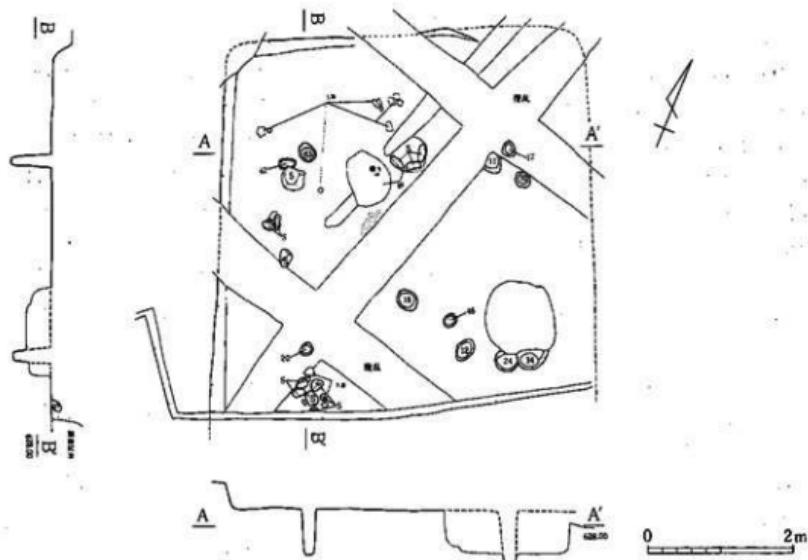
遺物の出土量はわずかで、甕・壺・高杯と、混入の縄文土器片があり、すべて小片である。甕は底部6と脚部11~16で波状文・斜走短縞文が施されている。7は台付甕の台である。8は壺の底部で、内面は剥落している。9・10・17は高杯か器台の脚部で、外湾気味に八の字形に開く。外面はやや荒れているが、刷毛などで後なでないしは笠磨きが施されている。

詳細時期は遺物の出土量が少なく、把握し切れないが弥生時代後期後半以降である。

③ 3号住居址 (挿図13第4・5図)

調査区ほぼ中央、1号住居址と2号住居址の中間に検出した。用地外にかかり、果樹園の肥料溝と配管溝に切られる。隅丸方形の竪穴住居址であるが、斜面下方の北東壁が残存せず推定規模(5.2×5.2)mである。主軸方向はN24°Eを測る。覆土は褐色土の一層であり、北東側は自然堆積の褐色土と差がなかった。壁高は斜面上方に当る西側が30cm前後、北側はそこから高さを減じ3.5mで消える。壁面はほぼ垂直に近く掘られている。床面は堅くタタキ状になっており、斜面と同方向の東へ約10cm傾斜している。主柱穴は4本で、東南は2本並んで検出した。北と南の主柱穴は肥料溝の底に残っていた。掘り方は不整円形で直径20cm前後と小形であるが、深さは床面から69~34cmと普通である。炉は2ヶ所にあり、新旧が確認できた。新しい炉は北側主柱穴間ほぼ中央に位置し、少し開くコの字形に炉線石3個を埋めている。炉の土層断面の観察では、中央に漆黒色土がほぼ方形に入っており、壺を抜いた痕跡かも知れない。旧炉は、新炉のほぼ南側にあり、上面は堅い貼り床になっている。甕を埋めた土器埋設炉である。黒褐色土の貼り床部分があり、そこを掘り下げ中、甕が出土し炉と確認した。甕の外側に、焼土の混入した褐色土の掘り方があり、平面図で1.5×1.2mの不整椭円形の外周は、緩い凹みであり貼り床になっていた範囲である。旧炉の南側床面に焼土がやや多く散布し、炉内から搔き出したものと考えられる。

遺物は比較的多く、甕・壺・高杯・石器等である。第4図18は旧炉に使用されていた、甕の脚部であり、器面の内外は刷毛調整が成されている。第4図19は炉と奥壁の中間床面から壊れて広



插図13 3号住居址

がった状態で出土し、そこからは底部第4図20も出土したが別個体であった。器形は口縁部に最大径をもち底部に向かって緩くカーブしながら細くなる。内面は稻料の茎束による雑な、ナデ痕が残っており、口縁少し下に炭化物の付着が見られる。器形は一般の壺と異なり、鉢形土器であり壺の可能性もある。第4図20～23は壺の底部である。第4図24は小形壺で旧炉覆土中から出土したが、全体形は不明である。第5図1は西側壁から60cm内側から出土し、器形は弥生時代後期の壺に共通するが無文である。第5図2・3は壺の底部である。第5図4は、高壺の壺部で口縁部を欠き全体形は把握できないが、壺部の底は小さく上部に向かってラッパ状に開き、中間に稜をもちそこからやや立あがり再度外反する。外面ともに横ナデ後刷毛ナデで調整している。第5図5～8は覆土中から出土した壺片で、波状文と斜走単線文が施される。石器は第5図9～12がある。完形品は11の磨製石鐵未製品のみであり、灰色の硅岩質の石で、少し磨かれている。9は打製石斧の破片で硬砂岩である。10は綠泥岩であり横刃として凶化したが、石斧の可能性もある。12は黒曜石の剥片である。

時期は、弥生時代後期から古墳時代前期である。

2) 遺構外出土遺物 (第5図)

遺構外から出土した遺物の内、弥生時代と確認できたのは13～15の土器3点である。13は厚さ5～4mmの壺洞部であり、上の波状文は緩くうねり下は急にうねっている。14は壺の頭部で、器面を刷毛調整後、細かな波状文を施している。15も壺であり、斜走単線文が二段残っている。これらは、調査区西端近くの1号住居址から西側で出土し、3点とも弥生時代後期座光寺原式期の土器である。

3 平安時代以降の出土遺物 (第5図)

幾つかのグリットから平安時代以降の遺物が出土したが、主体は近世陶器の小片であり、図示したのは次の3点である。16は山茶碗の底部でグリット23から出土し、胎土は非常に良いが、整形が雑である。回転糸切りで切り離した後、高台をラフに貼りつけており、初窯圧痕が著しく残っている。平安時代終末頃の製品であろう。17の磁石はグリット22から出土したが、時期の推定はできない。18は調査区内の表採で、寛永通宝の銅銭である。

IV まとめ

今回発掘調査が実施された場所は、笠松山麓から発する大扇状地の東向斜面にあたり、上部のほぼ平坦な場所は今年度秋季に調査を実施した直刀原遺跡である。広域農道の路線という限られた範囲であり、加えて周囲は永年作物の梨・りんご園ということで消毒用スピードブレヤーが

通れるだけは掘らないでほしいという要望があり、調査区が狭くなかった。その狭い範囲の調査においても、3件の住居址が確認され、大遺跡の可能性が非常に高まった。生活水源の確保を疑問視したのであるが、付近の人に尋ねたところ、斜面の北西方向50mの位置に湧水があると教えてくれた。湧水は用地が北に方向を変えた50m先にも出ている（調査区全体図参照）。遺跡全容の把握には至らないが、一端を確認したので、それらのいくつかを整理しまとめとする。

縄文時代の遺構は、小堅穴と土坑を確認したが、斜面ではなく扇状地上方の緩い斜面に位置しており、遺構外遺物もほとんどがこの周辺で出土した。遺構遺物とともに前期後葉から中期に位置付くものである。縄文時代の住居址は緩斜面に構築されていると想定され、調査区西端から西側の扇状地の上部緩斜面が最有力地である。

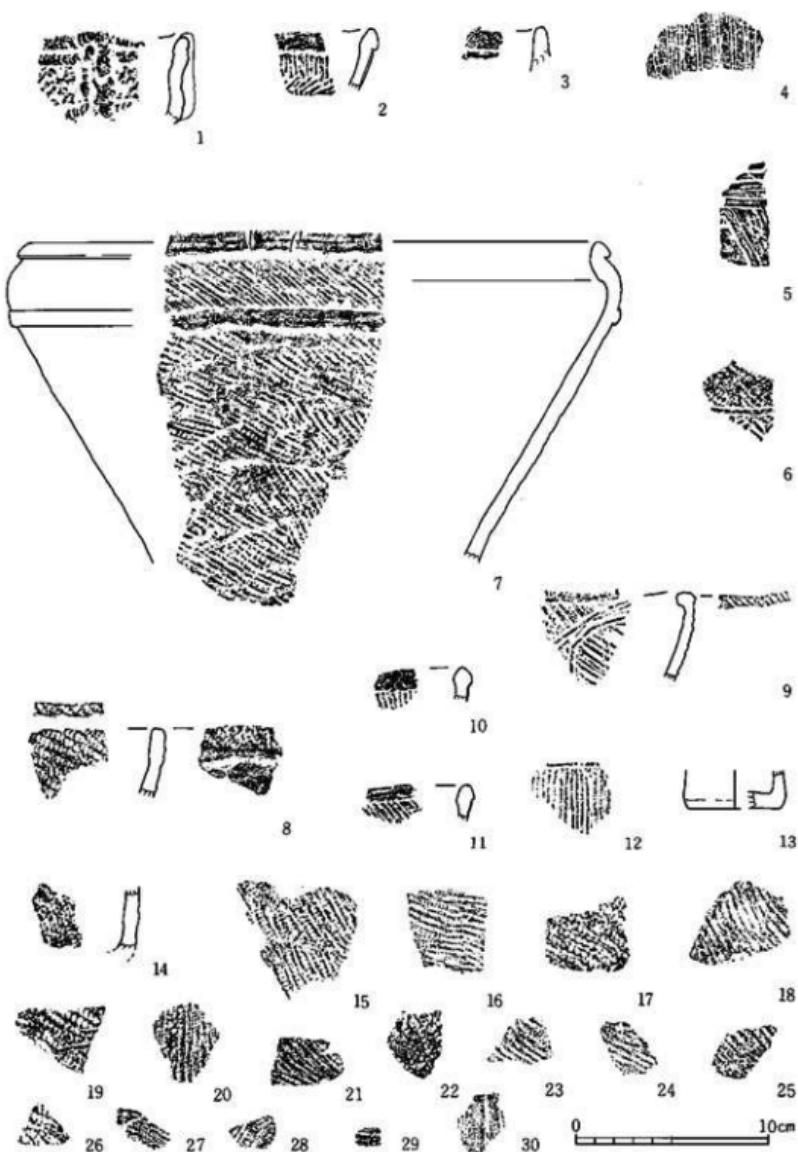
次に確認された3軒の住居址であるが、弥生時代後期から古墳時代前期に比定され、この大原遺跡は農耕が開始されたといわれる弥生時代に、何で生計を立てていたか一つの研究課題を提示したといえる。西部山麓線の遺跡発掘調査では、弥生時代の遺構・遺物が「梅ヶ久保遺跡」「細田北遺跡」においても発見されており、この二遺跡は標高680mを測り弥生時代では当地方最高所の遺跡である。次には標高650m代の市内上久堅「北田遺跡」・高森町「月夜平遺跡」があり、ついで当「大原遺跡」の標高630mである。以前から下伊那地方は水田にかわる陸耕が行われていたと定説になっているがその裏付けの遺跡が一つ増えたことになる。しかしこが主体の陸耕であるか、明確にはなっておらず、今後の発掘調査による炭化種子等の発見を待たざるを得ない。また、1号住居址から出土した有肩扇形石斧に残るロー状光沢は当地方他遺跡出土例と共通するものであり、近年の科学的研究の中で、対象物の確定も近づいており、本例もまた、貴重な資料といえる。

弥生時代後期から一定期間に置いて、気候の変化等の自然環境とも強く関連して、居住域・生産域の拡大が当地方にあったことは、「月夜平遺跡」・「北田遺跡」などにより、指摘されてきたのであるが、西部山麓線の調査で、当飯伊地方全域にわたっていることが強く示されたものといえる。

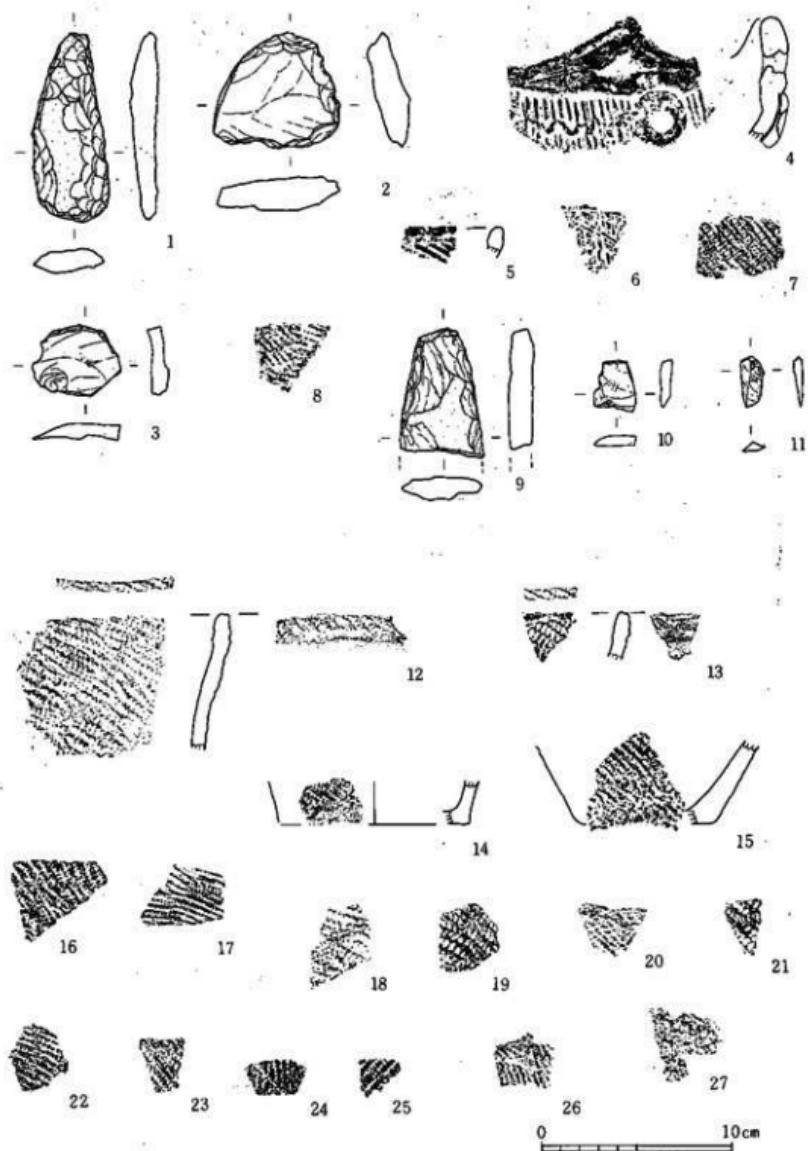
次に平安時代終末の生産と見られる、山茶碗片であるが調査区北端に近い、扇状地の斜面が終わって平坦になった位置のグリットから出土し、該期の遺構の存在をうかがわせる。

以上、今回の調査結果につき若干の整理をしたが、いずれにしても扇状地の斜面についての調査は、伊賀良地区ばかりでなく飯田下伊那地方においても、調査例は少なく新しい知見を得ることができる、今後の学術研究あるいは地域の姿を考える上で大きな役割を果たすものといえる。

図 版



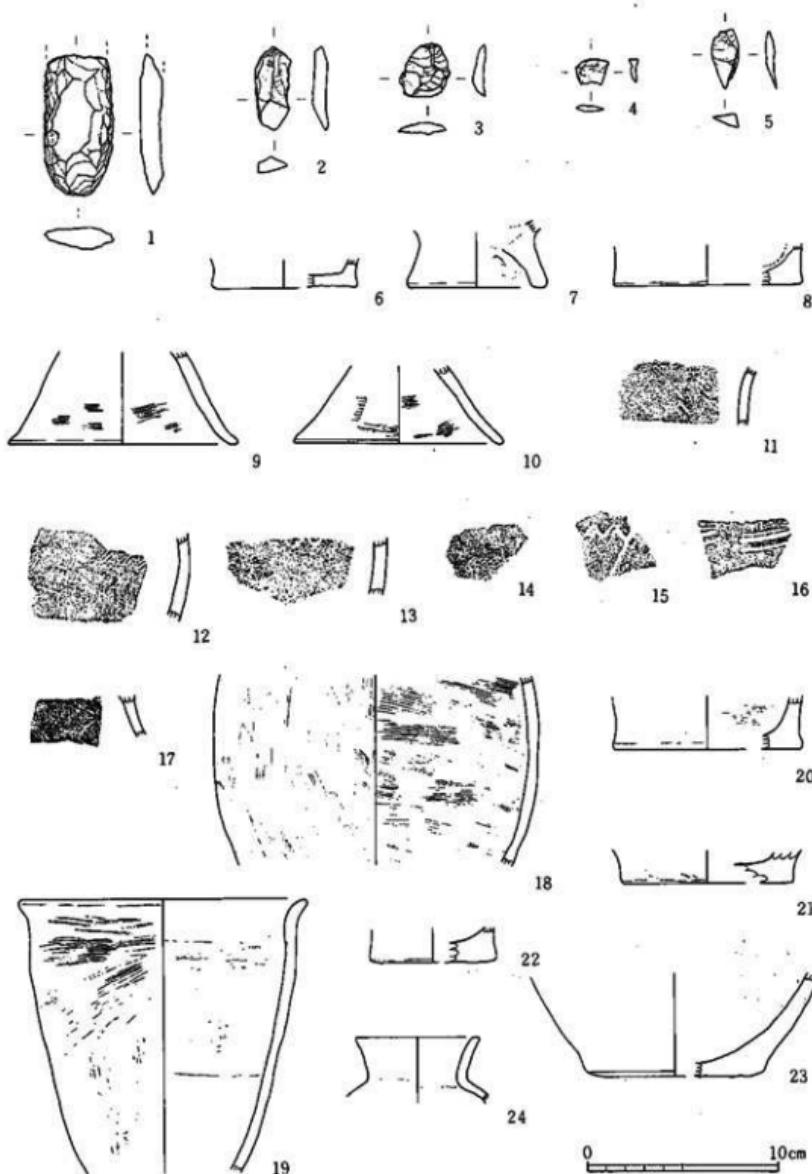
第1図 横穴1(1~6)・土坑1(7~30)出土土器



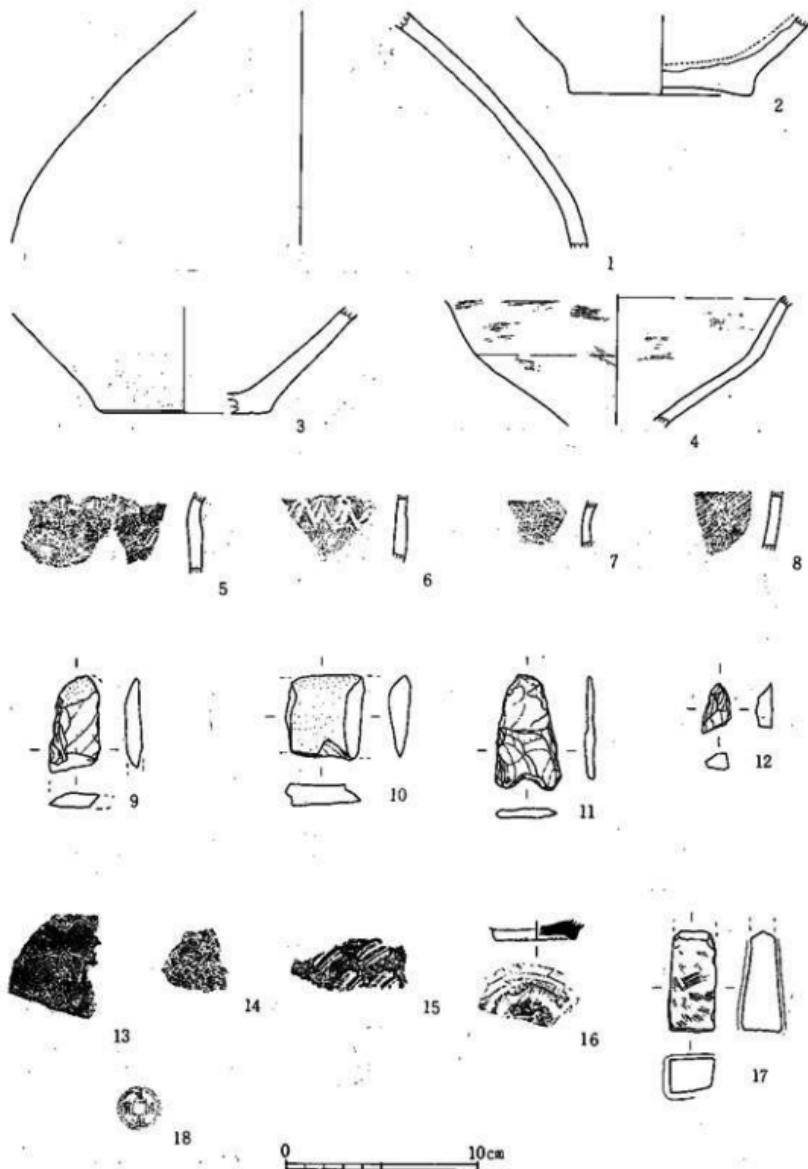
第2図 土坑1(1~3)・土坑2(4~11)・造構外出土(縄文時代12~27)土器・石器



第3図 造構外(1~17)・1号住居址(18~21)出土土器・石器



第4図 1号住居址(1~5)・2号住居址(6~17)・3号住居址(18~23)出土土器・石器



第5図 3号住居址(1~12)・造構外(13~18)出土土器・石器等

写 真 図 版

図版 1

調査前東より



遺構分布状態



同上



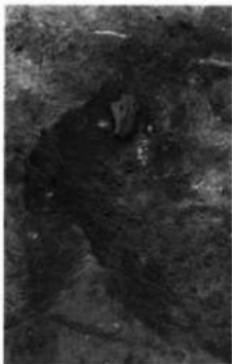
図版 2



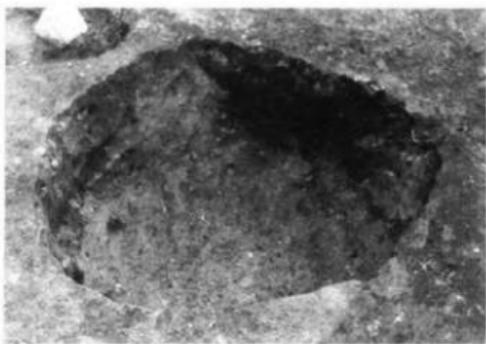
竖穴 1



土坑 1



同右 遺物出土状態



土坑 2

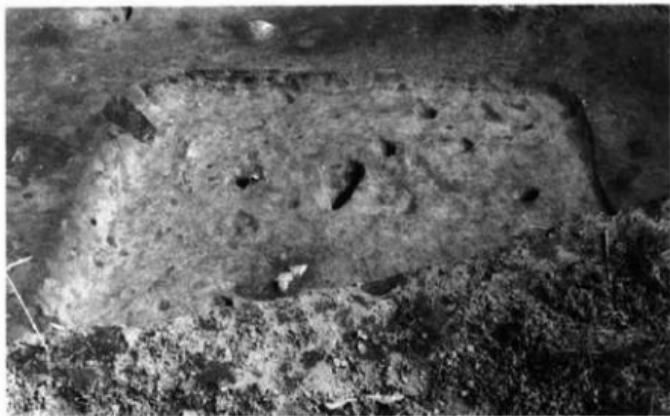
图版 3



1号住居址



同上 遗物出土状态



2号住居址



全 体

3号住居址



旧炉 新炉



旧炉断面

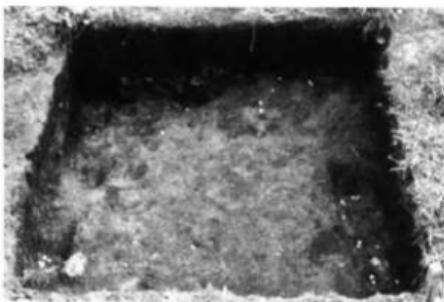


新炉断面

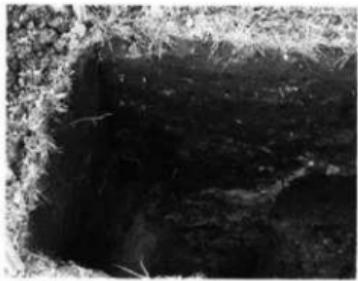


遗物出土状态

図版 5



グリット 10



グリット 25 造成状態



竪穴 1 出土土器



土器口縁

土坑 1 出土
土器・石器



土器胴部



石 器



土器底部

図版 7

土坑2出土



1号住居址出土



土 器



石 器



2号住居址出土土器



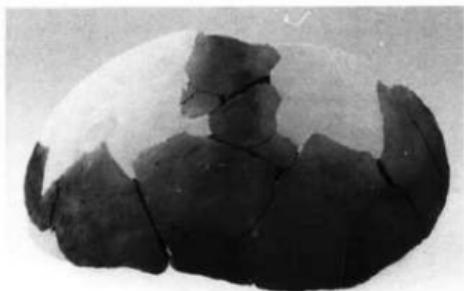
3号住居址出土土器



甌



甌



甌



高 瓶

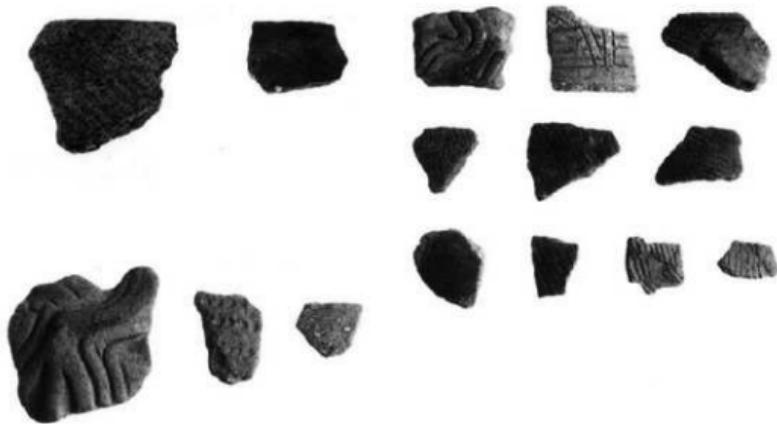


底 部

图版 9



3号住居址出土石器



造構外出土
土器・石器





1号住居址出土縄文時代土器



遺構外出土弥生時代土器



遺構外出土山茶碗・砥石

表様遺物

図版11



試掘調査



重機で表土剥ぎ



3号住居址調査

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書

大原遺跡

1991年3月 印刷・発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印刷 飯田共同印刷株式会社
